

やってきました、死

植物学のレイ師が土のついた手をふりふりして教壇に立ったのは、緑の月（五月）に入ったころだった。教壇の下には、手押し車に乗せられた巨大な鉢植えがある。縁までしっかりと土が入っているその鉢植えは、見習い二人がかりで外から運んできたものだ。彼らは、ときおりもぞもぞ動くその土を気味悪く思い、レイ師が「お手伝い、ご苦労様」と声をかけるやいなや、さっさと離れた。

レイ師は、ここへ来る前に土いじりをして砂っぽくなった手を教壇につけないうよう手首で体を支えながら、簡潔な自己紹介をした。それから、目にかかった白い癬毛を手の甲ではらい、細い首をのばして声を張り上げた。

「さて、みなさんが気になっているのは、綿毛頭の老婆ではなく、床にいる鉢植えですね？ ええ、わかっています。もちろんこの子のことも紹介します。

でもその前に、みなさんの基本知識を知りたいところですね。では、アシエキ、イムハククシイ土食らいの不思議な生態について、なにか知っていることを述べてちょうだい」

突然指名されたアシエキは、後ろに傾けていた椅子をがたと戻し、「……分かります」と答えた。

「なにか一つでも言ってみたら？ 当たるかもしれないわよ」

「ぶががつ」

そう応えたのは、クワールレンの隣に座るチャルーだった。彼は片腕で頭を抱え、ぐんなりと姿勢を崩して、いびきをかいていた。後ろでマウリンがけたけた笑う。チャルーは、最近、トルーヤとガルシュとともに『いっさいがっさい』へ通いつめており、昨日も夜遅くまで入り浸っていた。加えて、岩羊競争の訓

練がはじまったので、彼の睡眠はしばしば授業中に行われた。

レイ師が、土つきの手を上げたまま教壇を降り、チャル―の前に立った。クワ―レンは、チャル―の肩をつついた。

「かなりお疲れなようね、チャル―くん」

十回ほどつついて、ようやくチャル―は身を起こし、ねっとりくつついた瞼を開けた。そして師の姿に気が付くと、慌てて姿勢を正した。

「どこを読みましようか？」焦点の合わない目で、彼は教科書を開いた。

「読めとは言っていないわ。お疲れの理由はなに？ 私の授業をさぼるほどですもの。それらしい理由をつけていただかなくては」

「あー、そうっすね……、最近悪夢が続いてるんすよ。不眠症ってやつかな」

「では、あとで私のところに来なさい。とっておきのオンティイメフウス 猿眼草葉を渡しますよ。

不眠によく効くんです。私が特別に調査したものですから、光栄に思つてちやうだいな」

見習いたちは、おかしそうに笑った。チャル―は目をこすり、見習い帽子をかぶりなおし、「うい、ありがとうございます」と呟いた。

「さ、イムハククシイ 土食らいについてだったかしら？ わからないということなので、まず、生物の基本を確認しましょう。『エイネー植物学』の第一章を開いて。そこには、エイネーの生態系にまつわる、基礎的なことが書かれています」

見習いたちは、深緑色の分厚い教科書をめくった。三つの円が三角をなすように配置され、矢印が時計回りに書かれた図がある。それぞれの円の中には、動植物の絵が描かれていた。

「右下に、クセラス 光菜（黄色い花をつける離弁花類）やリグ ころ拳（球形の花をつける食用草）がありますね。それを、左にいるガエゲンム 胡麻蠅螂（かまきり 蠅螂の仲間）やコソ 三つ目飛蝗（ばった 飛蝗

の仲間)、雪鼠テイルキー（白い毛をした小型の鼠）などの小動物が食べます。それらを、上にいる猛禽類、シェイスパールトが捕食するのです。食べ終わった後、シェイスパールトは糞をする。その糞は自然界の肥料となり、植物は芽を出して、また新たな命を紡ぐのです。これは円となって、回り続けます」

何人かが糞のところまで笑ったが、レイ師は無視して先を続けた。

「さて、土食イムハウクシイらに戻りますが、彼らは小動物の仲間になります。彼らは、しかし、植物ではなく、その名のおり、土を食べて生きています。口の周りの触手で土を丸め、体内の特別な微生物によって土の毒素を分解、吸収し、それを栄養源としているのです。毒素を抜かれた土は、糞として体外に出されます。土食イムハウクシイらいが『土を変える』という言葉は、ここから来ているのですよ。彼らがこのような生態になったのは、有害物質の多いイドゥリ火山島の地中で暮らしていたからだと言われています」

そこでレイ師が鉢植えに目を向けたのと、クワーレンが椅子を引いたのがほぼ同時だった。一番前の席に座るクワーレンは、土が中央から盛り上がり、桃色の触手が何本か出てきたところをしっかりと見てしまった。

「さて、この土食イムハウクシイらいはもう待ちきれないようね。では、みんな席を立てて生きていくために体がどのように変化したのか、本物を観察してみましよう」見習いたちは喜んで鉢植えに近づいた。のけぞっていたクワーレンは押しつぶされそうになった。

さて、我先にと覗き込んだラーリエは、教室の壁を突き破らんばかりの悲鳴を上げた。

「きつも、蚯蚓みみずの大群だわ！」

「違うわ、これは触手よ。この下に口があるの。だれか、触ってみる？」

ラーリエだけでなく、好奇心旺盛なマウリンでさえ、激しく首を振って拒否した。「きもい、きもい！」彼らは口々に叫んだ。

レイ師は、そこで一人の見習いに目を留めた。「じゃあ、あなた、この子を引き出してくれる？」

師が言ったのは、灰色髪のミニユメだった。今日は珍しく授業に出ている。ラーリエとアシエキ、それにムオラーと幾人かの見習いたちが、にやにや笑った。彼らは互いを小突きあい、目くばせをした。

ミニユメは、嫌と言わなかった。それどころか、鉢植えに近づくと、思い切り両手を土に突っ込み、下の膨れた黒い物体を引き上げた。

蜂の巣をつついたような騒ぎになった。クワーレンも鳥肌が立って椅子を引いたが、後ろの机にぶつかり、もがく土食らいの足から飛び散る土を顔に受け

た。ミニユメは無敵状態で、「誰か」と言いながら、イムハクシイ土食らいをみんなに近づけ、

見習いたちは逃げ回るばかりだった。

「馬鹿野郎！」「こつち来ないで！」「戻して、戻して！」

「ほらほら、騒がないの！ミニユメ、少し持っていてくれる？さあ、みんな戻ってきて。ここが足、ここが手よ。すごいかぎ爪でしょう？これで土をかき分けて進むの」

レイ師が淡々と説明するので、逃げた見習いたちは恐る恐る教壇へ戻った。

席で硬直していたクワーレンも、冷静になるよう努めながら、イムハクシイ土食らいを観察した。黒い毛の生えたずんぐりした袋、それがイムハクシイ土食らいだった。平たい手には、

灰色の太い爪が生えている。後ろ脚はひどい格好で横に突き出していた。そして、何より気味が悪いのは、膨らんだ口先の、によるによる細かく動く触覚だった。

「ひでえ。これぞ悪夢だ」すっかり目が覚めたチャルーが、鼻に皺をよせた。

「この子、君と同じ、イドウリ火山島生まれだよ」クワーレンは言った。

「うえ、余計きもい」

ミニユメは、そんな土食らいを誇らしげに抱え上げ、「次は横にしてくれる？」

「お腹の部分を上にして見せて」というレイ師の指示に、助手のように慣れた手つきでこなした。

「よくもこんな汚いものを教室に持ちこんだわね」

教室の隅から、ラーリエはミニユメをぎらぎらと睨みつけていた。「汚い子は一匹で十分なのに」

彼女の声は、だが、レイ師の途切れない説明にかき消され、誰の耳にも届かなかった。土食らいを抱えるミニユメは、柔和な笑顔をこぼしていた。

昼休みに食堂へ向かったクワーレンは、ハールン牛の煮込みと、アッキ（無発酵パン。汁に浸して食べる）、それに、ナルウ苺と豆の汁をおぼんに載せると、いつもの席に向かった。窓際の、六人掛けの席だ。

すでに、マウリンとリリ、そしてエネーリスが座っていて、三人で何かを覗き込んでいた。

「また新聞？」クワーレンは近づくなり訊ねた。

「そうよ。自然の村で起こった、〈見えない死〉という呪いの話、あったでしょう？」エネーリスが顔を上げた。「それが広がっているんだって。獣の村でも出たらしいのよ」

「今回は、ちゃんとした新聞よ。あたしが取引して手に入れたんだから」リリが誇らしげにナルウ苺を口に入れる。

「ええと、何と取引？」クワールンは、彼女たちの向かいに座った。

「夕飯を作ってあげるの。だからあたし、明日は家にいないわ。3602番地に行くから」

「なんだって？　ということは、かまどを使わせてくれるっていうの、一年生に？」クワールンは、段々と小声になった。

リリは目を細めた。

「それは内緒よ、クワールン。五年生の家だからいいの。平気よ、試験を受けた彼らがいるんだし、あたし、火を焚くのうまいんだから。自分は丸焦げにならない」

「これ、絵が描いてない！　あたし、魔法動物の絵が見たかったのに！」かぶせるようにして、隣のマウリンが叫んだ。匙をくわえて新聞をのぞきこむ彼女の二つ結びの髪は、危うく豆の汁に入りかけていた。

「詳細は解明されていないって書いてあるわ。まだどんな魔法動物なのか、分かっているんじゃないかしら？」エネーリスが、髪をどかしてあげながら言った。

「きつと、細い筒みたいな口をしているよ」マウリンは言った。「それも、何本もあるの。それを使って、植物の………なんだっけ？」

「源力」リリとエネーリスが答える。

「そう、源力を吸い取る。まだ捕まっていないから、きつと逃げ足が速いだろうな。脚はナクミみたいに速くて頑丈で、たぶん、背中に翼も生えてるんだ！」マウリンが熱っぽく魔法動物予想を展開している間に、クワールンは首を傾けて新聞を読んだ。

「自然の村発生の〈見ええない死〉、精製炎効かず、獣の村へ」

昨年暮れより存在が明らかになった、新しい呪い〈見ええない死〉が、緑の月中ごろに入ってから、再び急速に範囲を広げている。

自然の村の農作地帯で起こった〈見ええない死〉は、生物の生命力（魔法学で言うところの「源力」）が抜き取られ、アベドに吐き気や不快感を与える呪いだが、一時、精製炎と土食らいの自然浄化により解呪の兆しが見えたものの、緑の月十一日、エスコル川の上流で発生が確認された後、次々と被災地が増えた。

エスコル川というと、四百年前より、魔法動物の〈河白獣〉の住処と言われ、栄養が豊富な川として知られていたが、最近では水源が縮小し、川幅も細くなった、いわゆる衰退した川だ。そんなエスコル川の上流で〈見ええない死〉が発見された理由について、地元の人々は次のように語っている。

「長年言い伝えられてきた話によりますと、このエスコル川は、別の場所に移った〈河白獣〉の住処につながっているとされています。〈河白獣〉は、何十年も前にエスコル川を去ったわけですが、それでもこの水源は、〈河白獣〉の住処から流れてきているものの一つである可能性が高いのでしょうか。そうでなければ、源力を吸い取ると言われている〈見ええない死〉が、エスコル川のような小さな川に来るはずがありません。〈河白獣〉の豊かな養分のために、ここが狙われたのです（自然の人 ベルヌオ）」

一方、獣の村では混乱が広がっている。被害にあったのは、放牧を営んでい

る、エディキラを家主とした一家だ。そこでは四十頭ほどのエイネー馬、五十頭ほどの岩羊を飼育しているが、〈見えない死〉によって、およそ五分の一の家畜を失った。

「まさかと思いました」エディキラは信じられないといった様子で語る。「〈見えない死〉の噂はかねがね聞いておりました。ですが、動物にもかかるものだとは思ってもいなかったんです」

動物にかかった場合も、対処法には精製炎を使用すると、ノウア様は公言している。しかしエディキラは、家畜が生きたまま燃やされることについて首を振る。

「〈見えない死〉にかかった家畜は、完全に死ぬわけではないんです。もぬけの殻になったように、突っ立ったままになります。目もこちらを向きません。自然の村の作物と同じように、見た目は普通でも、中身が失われてしまうのです。見ているだけで辛くなります。今まで元気に走り回っていたのに、ただ立っているだけになってしまうなんて……。そして私たちは、さんざん言われているあの気持ち悪さによって、長く愛情を注いできた馬や羊たちに、近づくことすらできないのです」

獣の人たちは、屠殺後に精製炎で最終的な処分をするよう、署名運動を行っている。しかし、精製炎の原材料である灯火蟬ナツクイカが底をつき始めているのも事実だ。ノウア様はじめ、アリア様も、さらに有効的な解呪方法を模索している。この一件により、〈見えない死〉は動植物にかかることが判明されたが、アベドにかかったという報告はいまだされていない。我々が影響を受けるのは、〈見えない死〉と対峙したときに現れる、異常な不快感だけだ。〈見えない死〉にかかった食べ物を食した者の話も出ていないが、魔導師ノウア様は、異変を感じたら絶対に口にしないよう、警鐘を鳴らしている。

この魔法動物がどこからやって来たのか、なぜ〈見えない死〉を引き起こしたのか、その詳細も捕獲方法も、闇の中だ。

（つくりの人 〈記す者〉アヨラ）

クワーレンは、食べていたアッキを小さく噛みちぎった。

「それにしても、ノウア様が捕まえられないなんて、この魔法動物はかなり強いんじゃないかな！」マウリンは、叫んで口からこぼれたアッキのかすをまた口に押し込んで言った。

「〈見えない死〉の話か？」

いつの間にか、クワーレンの隣にイムサがいた。

「そうだよ。獣の村に広がってるんだって」クワーレンは、新聞を彼の方に寄せた。

「魔導師様たちは何をやってるんだろうな。早く捕まえないと、全土に広まっちゃもうって」イムサはアッキにハールン牛の煮物を挟んで、がぶっと口に入れた。

クワーレンは、新聞を見下ろした。〈見えない死〉の記事は一面を飾っているが、下にある「黄金^テの血^ロ 新発売の味 ペニヤッツ風味！」の広告が、紙面を樂しげなものにしていた。前髪を横になびかせた男の子が、黄金^テの血^ロを口につけて笑っている絵が描いてある。「二つの贅沢を一度に！」とかなんとか。

「それで宿題がなくなるとは限らないわよ」リリがマウリンに言っていた。

「じゃあ、どこに〈見えない死〉が来たら、宿題はなくなるの？」

「そうねえ。もっと、エイネー中が〈見えない死〉にかかって、食糧不足とかになったら、宿題はなくなるんじゃないかな？」リリは軽く言った。

「ちよつと、そんなこと言わないでよ」とエネーリス。ぞつとして身をすくめる。「本当になったら嫌だわ……」

「だって、ありえるでしょう？　もし魔法動物が一生捕まらなかつたら……ねえ？」リリはイムサに訊ねた。

イムサは二度頷き、「だが、宿題がなくなるのは楽しみだ」と言った。

クワーレンは、黄金テの血ルの広告で笑っている男の子の前髪を、何度かこすつた。指に付いていた肉の油によって、男の子の笑顔は徐々に滲んでいった。



休日、マウリンたち少女三人が、『いっさいがっさい』へ出かけていった。他の学舎の見習いたちが集まる交流会があるらしい。まだ一度も『いっさいがっさい』へ行ったことのないクワーレンは、気にはなったものの、その日は、店と反対の方角へ行くことになった。

チャルーを誘いにきたトルーヤとガルシュが、のこぎり魚ザクローナ釣りにクワーレンも入れてくれたのだ。のこぎり魚ザクローナは川に住む青鼠色の魚で、背から尾にかけてのこぎりのような鋭いジグザグ模様があるところからその名が付けられている。あまりおいしくないらしいが、珍しく金色をしている咽頭歯は高く売れるのだ。そうで、小遣い稼ぎにと、チャルーたち三人は、あらかじめ計画していたようだった。

釣り竿を持っていたのはチャルーとガルシュだけだったので、クワーレンと

トルーヤは桶を持った。雲がすっかり掃かれた瑞々しい縹色はなだの空が、青エイレスイルアエウツァの真中山の峰によってくつきりと区切られている。端麗な青エイレスイルアエウツァの真中山は、空の青色を吸い込んで気品ある薄紫に映った。そんな青エイレスイルアエウツァの真中山を前にしながら、少年四人は、萌え出た若葉で万緑に輝く丘の合間を歩いていった。

右手には、鋭い葉を周囲に向けて威嚇する松の森がある。魔導師の木を中に隠すその森は、木立の間から妖しい誘惑を投げてきた。日が昇ってからまだ浅い、若い木漏れ日が、なにかのはじまりを教えている。だが、見習いたちは、それを遠くから眺めて過ぎるのみだった。入っては帰って来られないと、保育部屋時代にさんざん言い聞かせられてきたからだ。

「向こうに、明るく黄緑に輝いている林が見えるか？ あれが蛇の目林はやしだ。あの林の中にうなずき川っていう小川があって、そこでのこぎり魚ザクワナが釣れるんだってさ。上級生もいっぱい来るところらしい」

松の森を無視するように、ガルシュが、やがて見えてきた広葉樹の一角を指して言った。

「じゃあ、あの大きな森は？」

クワーレンは前方を指して言った。青エイレスイルアエウツァの真中山の麓を覆うように広がるその夜色の森は、峰のその向こうまで続いていた。

「あれは近づいちゃいけないって！ シルレイヤの森だよ？」

そう言ったのは、隣を歩くトルーヤだった。背の低い彼は、クワーレンを見上げるようにして話した。

「シルレイヤって？」

クワーレンは、一度、3015番地にはじめて来たとき、御者のグーマーか

らシルレイヤのことを聞いた記憶があるが、詳しくは忘れていた。たしか、シルレイヤの森が近いから、ここにはあまり家が建てられなくなった、というような話だった。

「ええと……、なんというか、シルレイヤっていう木が喋るんだってさ。ね、言ってたよねえ？ ガルシユ。あの五年生！」

「言ってたっけ？ 俺、川の場所しか聞いてなかったわ」

「木が喋るのか？ 樺は木です」って？」チャルーが、木の声を太くして言った。
「わっかんねえっすよ。マルゴンの胸板みたいに強靱じゃなきゃ、答えらんねーっす」

ガルシユも野太い声で答えた。これにチャルーとトルーヤは、ゲラゲラ笑った。後になって、これは『いっさいがっさい』に来ていた芸人マルゴンの物真似だと知ったが、この時のクワーレンは、見えない壁に弾かれたように、一歩下がって小さな笑いを浮かべるのみだった。

うなずき川は、蛇の目林を半マウオ（約三十分）歩いたところにあつた。川底は浅く、流れも平穏なうなずき川は、磨き上げた翠玉のような若葉の天井の下でゆったりと凩いでいた。上級生がいたら場所を確保するのが難しいだろうと覚悟していたのだが、その上級生はなぜか一人もおらず、少年四人はこれ幸いと、一帯を占領してのこぎり魚釣りに専念した。

しかし、代わりに釣れたのは、小さな赤鎧アカシイロ（川に住む甲殻類）二匹で、どれほど糸をたらししてもものこぎり魚ザクワナは釣れなかった。

「偽情報を掴まされたんじゃないかねえか？」チャルーが蚯蚓みみずを釣り針に刺しなおしながら言った。

「釣られたのは僕たちってこと？」

クワーレンの言葉に、ガルシユは指をぱちんと鳴らした。ガルシユはそれか

ら、やけになって川に飛び込み、泳ぎ始めた。四人はそれ以降、釣りを諦め、魚になって泳いだ。夕方になると、赤鎧アッシュグレイトを一匹ずつ桶に入れて、それぞれ家に持ち帰った。

「この子、あっちゃんって呼ぼうよ！」

赤鎧アッシュグレイトを見るなり、マウリンはそう言った。

「馬鹿。こいつは首切り戦士って名前だ。ガルシユの赤鎧アッシュグレイトと今度勝負させるんだから、強い名前にしねえと」チャルーは赤鎧アッシュグレイトに触ろうとするマウリンの手をひっぱっていた。

「それのもっと大きいやつを3062番地では捌いていたわよ。団子にして揚げるの。すっごく甘くて……」

「リリ！ あっちゃんは食べ物じゃないよ」

「お腹の部分なら、一口分、いけるんじゃないかしら？」

エネルギーがそう言うので、リリも真面目になって赤鎧アッシュグレイトに手を伸レした。チャルーとマウリンは、悲鳴を上げて彼女の手を叩く。クワールレンは大笑いしたが、心のどこかに、冷たい焦りがあった。その正体は、姿かたちさえ見えなくとも、どんどん大きくなっていることを、彼は感じ取っていた。



「岩羊競争の訓練は、どんな調子？」

その正体ははっきりわかったのは、この質問をチャルーにしたときだった。

学舎の日。星読み学のマーゼン師は、星座の種類と位置、形をすべて覚えるよう、課題を出した。マーゼン師は、四角い眉をぴくりとも動かさず、血色の悪い顔で、見習いたちに一冊ずつ星読み学の教科書を配った。丁寧に、机の真ん中にきつちりと置いていくその様子は、まるで人形のような。

クワールンたちは、緞帳の引かれた薄暗い観測室におり、マーゼン師のかたい喋りによって集中が途切れていたが、部屋の中央にある星座投影機の起動によって、一気に好奇心が高まった。星座投影機は、石灯を内包する小さな穴の開いた多面体、といったところで、内側からの光によって星空が天井に浮かび上がった。

「ではまず一つ目。これが、岩羊座です」

マーゼン師は、南に位置する、四つ足の生えた四角を示して言った。とうとうとマーゼン師が星の動きを説明する中、クワールンは先ほどの質問をチャルーにしたのだ。

それに対するチャルーの答えは、こうだった。

「お前、岩羊に乗らないだろ」

彼の目は、じっと岩羊座に向けられていた。聞いたクワールンは、顔を強張らせた。

「……どういう意味だよ」

「お前は、素潜り競争に出たらいいんだ」

その意味がわかったクワールンは、怒りと恥で言葉を詰まらせた。素潜り競争は、波の穏やかな東南部の海域で潜水の深度を競うものだが、出場できるのは女だけだった。男の岩羊、女の海というわけだ。

「金槌は死ぬわよ？ あと中身のないやつも負け。浮かんでおしまい」言った

のは、後ろのリリだった。

「は、意味わかんね」

「考えなしに話すやつは敵をつくりやすいつて言っているのよ」

リリの言葉には冷笑が含まれていた。クワーレンはありがたくも思ったし、チャルーに言い返せない自分にも腹が立った。分厚い緞帳に閉ざされた観測部屋は、小さな星々がくるくると回って物語を紡いでいたが、息苦しくてならなかった。

なにか言ってやろうともがいている間に、授業は終わり、昼休みになってしまった。

「岩羊競争に参加する者は、昼食後、訓練場に集合しろ。遅れるな！」

食堂でポウを齧るやいなや、食堂の入口から先輩見習いが呼びかけた。チャルーは、ポウをねじ込み、仲間たちのところへ飛んで行く。「ガルシュ、トルーヤ！ 早く行こうぜ！」

クワーレンは、無言でポウを口に押し込み続けた。俺はかっこいい、お前は情けない、そんなやつとはつるまない、チャルーはそんな態度を変えるつもりはないようだった。ああ、いいだろう。なら、僕だって受けて立ってやる……。

悶々としていたところに、イムサがやって来た。紙きれを脇に挟んでいる。座る際、彼はそれを食事台に放ったが、咄嗟に、リリが手を伸ばした。

「何これ？」

彼女は、二つ折りにされた紙を広げた。エネルギーも覗き込む。

「主の祭り見習い頭脳大会？」同時に二人は言った。

「出るかは、まだ決まってない」

「分かったわ。オクルに誘われたんでしょう？」エネルギーは、そうと確信して訊ねた。

イムサは、肩をすくめた。

「えっ、上位十名は、アスハリエイク国交換留学生の資格授与だって！」リリが叫んだ。「あんた、これを目指すの？」

「参加資格があるのは、一学期の成績優良者だけだ。まずそれにならないことには、出場できないんだよ」イムサはポウに噛みついた。

リリは、肘でエネルギーをつついた。

「あんたも出られるかもしれないわよ。西穴熊^{ラシヤ}学舎のサーリエと勝負したらいいわ」

「サーリエには勝てないわ。『いっさいがっさい』の料理名をヤママイ語に翻訳していたでしょ？ 私、それほど頭はよくないわ」

「ま、やばい事に巻き込まれながら、ばれないようにしてたあんただもん」リリはイムサに向かって言った。「アスハリエイク国に渡ったら、お土産よろしくね」

イムサの顔は一瞬固まったが、「ん」と、豆の汁を飲みこんだ。

「クワーレンは主の祭りでなにか出るの？ タコ釣り大会とかいいんじゃない？ ずっと糸垂らしてるだけだし」

リリの問いに、クワーレンは急いで首を振った。

「僕は屋台をまわるだけで十分だ」

だがクワーレンは、当日の過ごし方が頭に描けなかった。七日間ある主の祭りは、二か月に及ぶ太陽の長期休暇の間に行われるが、そこでどれだけ楽しい思い出を作れるかが、長期休暇のすべてを決めると言っても過言ではなかった。見習いたちは、気の合う友人たちと、時を忘れるほど飲んで食べてを楽しむ気満々でいた。

クワーレンもその一人で、もちろん3015番地の六人で過ごすつもりだっ

だが、それはとんだ勘違いではないかと、最近はやえ始めていた。焦りの正体とは、まさにこのことだったのだ。

自分は後れを取っている。入舎して変わっていないのは自分だけではないか？ いったいどこで間違えたのだろう。ミニユメですら、授業で注目を集めたというのに。僕には、3015番地以外の友人が、一人もいない。そしてチャルーときたら、あの態度だ。クワールレンは腕を叩あおって、汁の最後の一口を飲みこんだ。

昼食後、魔法学のファマエン師の授業が始まって、しばらくクワールレンの隣は空席だった。岩羊競争の練習が長引いて、チャルーが戻っていないのだ。クワールレンは、明日の朝食に猥眼草薬オンタイムワックスでも混ぜて、眠りで潰してやろうかと考えていたので、戻ってこなくともどうでもよかった。

教壇に立っている魔法学のファマエン師というのは、首が前に突き出た老人で、ピンとまつすぐな白髪を正面で分けた、短躯なアベドだった。がにまたで、酔っ払いのようによたよた歩き、目がいつも怪しく光っている。

クワールレンも、そんなファマエン師の眼光に負けず恐れ顔をしていたが、師の発言は真似できなかった。

師は、汗水たらして遅れて帰ってきた岩羊の選手たちを見ると、こう言ったのだ。

「お前たち、美しい岩羊の糞は見られたか？」

チャルーたちは動揺しつつ、にやにや笑いを浮かべた。

「糞を見たのかね、見とらんのかね！」ファマエン師は重ねて問う。

「い、岩羊は見ました」とガルシュ。

「そう、遠くで！」チャルーは笑ったまま、クワールレンに背中を向けるかたち

で席に座った。

「もったいない。岩羊の糞はとんでもなく綺麗なんだぞ。あれに、力が宿っているんだ。小さな粒がこれくらいの量で出てきて……」

フアマエン師は、両手で見えない塊を持ち、力を籠める仕草をした。現実的なその大きさに、見習いたちは、わーわー叫んで顔をそむけた。

「なんだ、糞の力を知らないというのか。すべての生きものが出すものだぞ。あれは自然界において重要な役割を果たしているが、魔法学的にも、ものすごく重要な物体なのだ。……よし、これを見ろ」

フアマエン師は、乱暴に青の粉枝バダグを取ると、黒板にぐるっと円を描いた。

「見る。これがなんだか。……お前、お前答えてみる」

桃茶の髪の少女、ラーリエが指名された。ラーリエは、ぐちゃぐちゃの青丸に顔をしかめた。

「……知らないわ」

『知らないわ』なんて物体はない。はい、次、お前答えろ」

トルーヤが指名された。トルーヤは焦りながら顎を掻き、ついに、「泉！」と答えた。

「馬鹿、違う。流れを読み、流れを。……じゃ、お前、答えろ」

一番前のクワーレンが指名された。クワーレンは、書き殴られた乱暴な青丸と、師のぎらつく目に気圧したが、押し出すように答えた。

「……糞ですか？」

「なんで疑問形なんだ。まあいい、そう、糞だ。で、何の糞だ」

「あ、岩羊！」横からチャルーが答えた。

「指名してないが、正解だ！金の少年と黒髪坊やに、それぞれ一点！」

チャルーとクワーレンは、目を合わせた後すぐに背けた。フアマエン師の授

業では、時折、点数がつく。意味はないが、いまはたいして嬉しくなかった。

ファミエン師はその後、岩羊の糞の美しさについて長い間説明した。岩羊は、身だしなみを整えるために自分の毛を抜くのだが、それを餌と一緒に食べてしまうらしい。そのおかげで、糞が青くなるのだという。

続けて師は、青い糞にある唯一の力を説明した。

「魔法学的に岩羊の糞の用途はだな、魔法動物を射る矢じりを作るときに使われるのだ。鑄造する際、粉末状にした糞を入れる。そう、岩羊の糞には〈内世界〉の住民である魔法動物を射る力があるのだよ！」

ファミエン師は、目をひん剥かせた。「おつかしな話だが、よく考えれば、その理由も分かる」

彼は、白い粉枝バダグを取って説明した。

「岩羊は青の真中山エイレスイルアエツアに住んでいるだろ。だが、青の真中山エイレスイルアエツアには、魔法動物がたくさん寄り付く。岩羊はそんな魔法動物に、糞の匂いでここから先は〈現〉だと教えているのだ。無駄に〈現〉にやって来ないよう、岩羊は、魔法動物にも強烈に匂うように〈現〉と〈内世界〉の合間の糞を出すようになったのだ。いわゆる、縄張りを示しているのだ」

ファミエン師は、青い丸の上から、左右に一つずつ円を描いた。今、青い丸は、二つの丸の上にあった。

「では、無魔力者でも岩羊の糞を使えば、魔法動物への攻撃が可能なのでしょうか？」秀才オクルが、大きな手を挙げ質問した。

「オクル、オクル。その通りだ。だが、なんの考えもなしに俺たちが糞を投げても、魔法動物には効かないだろう！ なぜなら、俺たちには魔法動物を見る力がないんだからな。我々が攻撃できるのは、魔導師様の可視呪文によって、

やつらが見えるようになった時だ。……しかしだ。いかんせん、我々はただの無力なアベドだ。魔法動物には、やたら対抗しない方がよい。魔法動物を攻撃できるのは、力を持ち、魔法動物が見える者だけ。そう、魔力を持つ者だけなのだ！」

ファマエン師はそう叫び、粉枝バダグで黒板を叩いた。砕かれた粉枝バダグの粉は、教室の床へと空しく落ちていった。クワールレンはそこに、やつつけられた魔法動物と、おいていかれる自分の姿を見た。

クワールレンの逆襲計画は、思いもよらないかたちで消え失せた。無益だからと悟ったわけではない。もっと大きな事態が、食堂という大事な機関を狂わせたのだ。

それは、ファマエン師の授業のあとのことだった。糞の話をさんざん聞かされた後で食欲が出なかったが、食堂へは走って向かった。なぜなら、特別な蜜鈴チャリプが夕飯に出るからだ。蜜鈴チャリプは、ヤママイ国原産の果物で、太陽の季節前にしか収穫されない、アベドの頭ほどもある甘いご褒美だった。みずみずしい汁気は蜂蜜のように甘味があるが、歯触りはもっちりしている。今回の蜜鈴チャリプが特別なのは、北熊学舎ノールの畑で採れたものだからだった。畑を管理しているレイ師によると、最高の出来らしい。

見習いたちがこぞって食堂に飛び込むと、いつも料理が並んでいる陳列台の隅に、長机が一台増えており、そこに野菜が山積みになっていた。葉物、果菜、

根菜、はち切れんばかりに育ったそれらは、身を寄せ合って並んでいる。

『北熊ノールの採れたて野菜！ お好きにどうぞ』だって！」マウリンが、立て看板を見つけて歓声を上げた。

「これ、芸人ヨーゲムの太鼓腹みたいだ！」チャルーがそう言つて、丸々太った柑橘のバスサムに手を伸ばしたとき、突然、その手をイムサがはたいた。

「おい、あれ見ろ！」

彼は、三つの入口に顎をしゃくった。一番右の扉に、見習いが集まっている。だれも、なにも言えなかった。それは、前兆などなく、突如として起こった。まず、クワーレンの目に、倒れた見習いの姿が飛び込んできた。

「誰か、師の人を呼んでこい！」

先輩見習いが叫んでいる。のつぼのカリューだ。何人かが駆け出す。だれかが箒を持ってきて、入口の地面を必死にたたく。あれは……蜜鈴チャリフだ。とたん、クワーレンの全身に鳥肌が立ち、嗚咽が漏れた。音が遠ざかり、地面が近づく。何が起こっているのかわからないまま、チャルー、マウリン、リリ、エネーリスもイムサも、食事をしていた見習いたちも、みんなうずくまり、幾人かは悲鳴を上げて食堂から飛び出した。それと入れ替わりに、師の人たちが入って来た。

「みんな、ここ野菜を手取るな！」

ステラウル師が大声で叫んだ。その間に、倒れていた見習いが師の人によつて運ばれていく。ステラウル師の横から、綿毛のようにレイ師が飛び出し、山積みの野菜へ駆け寄った。

「ああ、そんな……。ああ、そんな……。」レイ師はそのまま膝から崩れ落ちた。

いつの間にか、魔法学のファマエン師がずかずかやって来た。師は、傍の3

015番地の見習いたちを睨みつけた。

「この野菜を齧ったりしていないな？」

「……はい」エネーリスが答える。

「触ってもいないな？」

チャルーが無言でぶるぶる首を横に振る。

「だったら、急いでここを出るんだ！」

「あんまりだわ、あんまりだわ！ 苦労して育てたのに……こんなところまで来るなんて！」

レイ師は嗚咽をもらして悲痛に泣き続ける。入り口では炎が上がっていた。

ステラウル師が焼いているのだ。横倒しになった荷車からこぼれた、チャリップ蜜鈴を。

これらの状況を見て、すべてを理解したイムサは、ぼつり、「〈見えない死〉

……」と呟いた。

フアマエン師は、目ぎらつかせた。

「わかったら、早くここから出ないか！」そして、食堂全体に向かって叫んだ。

「早くここから出る！ 全員、出る、出る、出る！」

食事をしていた見習い、そしてクワーレンたちも、フアマエン師の恐ろしい

怒号に押されて、急いで残りの二つの扉から逃げ出した。

クワーレンたちは、針葉樹の記念塔まで、必死になって走った。

「なあ、あれ、まじやべえんじやねえの！」笑いながら、チャルーは言う。

「なんで笑ってんのよ！」リリが怒鳴る。

「笑うしかないだろ」イムサが言った。

彼らは走り続けた。微笑んだり、怒鳴ったり、震えたり、忙しい。頭の中は、興奮したルードルが駆けまわっているみたいだった。

記念塔にたどり着くと、一人の師の人が、師の棟の前で手を振っていた。

「みな！ 早くこっちへ来なさい！」

その腕の長い師の人を見て、チャル―の瞳が輝いた。

「ベロイユ師だ！ 行こう。動物学の師の人だ！」彼は急いで駆けだした。

「岩羊について教えてるアベド？」リリが気づいて問う。

「そう！」

ベロイユ師に向かうチャル―は、まるで知らないアベドだった。

「さあ、早く入りなさい。事態がおさまるまで、ここで待つように」

ベロイユ師は、やって来る見習いたちに言い、腕を振って中へ促した。

「ベロイユ師！〈見えない死〉ってうつるんですか？ 俺たち、どうなっちゃう？」近づくなり、チャル―は訊ねた。

ベロイユ師は、困惑した顔を見せた。もともと細面で、下がり眉のベロイユ師は、おかげでさらに不安気に見えた。こけた頬も、年による目元の小さな皺も、短く剃られた白髪交じりの襟足も、どこまで頼りにしているのか、この状況では判断できない。

「ひとまず、今は離れているべきだ。ささ、中へ」

「でも、あたしたち、まだご飯食べてないよ！」マウリンが悲痛に叫んだ。「お腹空いちやう！」

「あとで、他の師の人たちと相談するよ。もしかしたら、今日は食堂では食べられないかもしれない……」

「そんなあ！」

「いいから、中へ入ってなさい。みんなが入れるように、できるだけ奥へ行く

んだ。いいね？」

ベロイユ師は、見習いたちの背を押した。クワールンは、背中に当てられたその手から、強い恐怖を感じ取った。

師の棟には、すでに多くの見習いたちがいたが、その後も次々と入ってきた。みんな同じように興奮していて、声高に喋っている。

「わー、やばいね」

追い立てられるように三階へ行き、吹き抜けから様子を見るなり、リリはぼつり言った。その後ろで、誰かが吐きそうな声を漏らした。「ベロイユ師に知らせて！」一人の見習いがうずくまっている。仲間の一人が大急ぎで下へ向かう。緊迫した空気が、見習いたちをさらに萎縮させる。

クワールンは、どこかでこの光景を見たような気がした。いや、光景というよりかは、感覚だった。腹の底をかき混ぜられているような、それでいて、胸ぐらを掴まれ、逃げ出せないような……。それらは、うずくまって耐えるしかないのだ。一瞬、一本の灰色の木が自分を見下ろしている幻影が浮かんだが、ベロイユ師と、お団子頭のアマキン師がやって来たところで消えてしまった。ベロイユ師は、体調不良の見習いを抱え、階段を降りていった。

「他に具合の悪い者は？」

アマキン師が、切羽詰まった表情で周りを見渡す。誰も手をあげなかったが、身を寄せ合い、目を見開いて、次になにが起こってもいいように身構えていた。

アマキン師は、端から見習いたちに声をかけはじめた。「大丈夫よ。すぐに終わるわ」「あなたはどうか？ 具合は悪くない？」「ええ、そう、あとで温かい岩羊の乳を届けましょう。すぐに気分がよくなるわ」「六年生ね？ この子たちをよく見ていてちょうだいな。よろしく頼みましたよ」

アマキン師は、手すりにへばりついているクワールンたちのところにもやっ

て来た。

「ああ、あなたたちも平気？ 大丈夫？」

アマキン師は、心底心配そうな顔をした。彼女は、一番手前にいたクワローレンの肩を力強くつかんだ。

「一年生で、まだ入ったばかりでこんなことが起こって……ええ、不安よね」

「大丈夫です、アマキン師。……あの、アマキン師、これって前にもありませんか？」

クワローレンは、自分でも何を言っているんだと思ったが、遅かった。

「え、前にも？ どういうこと？」

師は、ぞっとしたように、クワローレンを頭から足の先まで一瞥した。顔には、あなたほんとうに大丈夫か、どこかへ連れて行った方がいいんじゃないかと書いてある。

クワローレンは、急いで首を横に振った。

「いいえ。何でもありません！」

「アマキン師、明日の授業はどうなるんですか？」クワローレンの後ろから、イムサが訊ねた。

アマキン師は、クワローレンの肩を掴んだまま、彼に答えた。

「まだ分かりません。ですがきつと、魔導師様が解決へ導いてくださいます。

そうです、こんなことは一瞬のことですよ。すぐによくなり、通常の生活に戻りますからね、ええ。すぐに元通りですから」

アマキン師は、強く何度も頷き、微笑んで去った。

「……本当かしら」エネーリスがか細く呟く。

クワローレンは、一階を見下ろした。真四角の吹き抜けの下で、白い見習い帽子がうようよ動いている。雫の照明の向こうに隠れたり、そこから現れたり。

彼らの不穏なざわめきは、別のざわめきを呼び起こした。

灰色の木が、クワーレンを見下ろしている。梢を揺らして、手のひらほどの大きな葉が散ってゆく。腹に穴をあけられ、泥を詰め込まれたような不快感がある。吐き出さないと。だが、うずくまっているうちに、川のせせらぎが聞こえ、陽の光が自分を抱くのだ。ざわざわ、ざわざわ。一人だが、心細くはない。心細くはないが、身の内を引っ搔くような恐怖があるのはなぜだろう。

坂の下から、ピクランタがやってくる。

「どうしたの？」

リリの声だった。

気づくと、手すりをつかんでいたクワーレンの手は汗でびっしょりになり、足はがくがく震えていた。

「顔色、すごい悪いよ。まな板にのった魚みたい」リリは本気で心配していた。

だが、クワーレンは、首を振った。

「なんでもない、なんでもないよ」

クワーレンは、だが、知らなかった。焦りと哀しみの根本は、もっと別の場所にあるのだということ。



師の人だけになった食堂は、レイ師のすすり泣きと、入口の炎が爆ぜる音しかしなかった。そこへ、左の扉から一人の師の人が入ってきた。ギュグリンブ師だ。

「（見えない死）にかかったのは、チャリフ蜜鈴だけですか？」ギュグリンブ師は硬く問うた。

レイ師は嗚咽を漏らして、乱れた白髪頭を振った。

「いいえ……わかりません。もう私……。ああ、収獲させた見習いはどうなったんでしょう？ 助かります？」

レイ師は、ギュグリンブ師の質問にしっかり答えられなかった。目尻にたまった雫が光る。

「さっきの見習いは、医療室のモルナに任せてあります」ギュグリンブ師は、はきはきと答えた。

「あいつはどうした。ハイズデヒのじじいは」ファマエン師はあたりを見わたした。「この騒ぎに來ないってのは、どういうことだ！」

「学舎長は、知らせを受けて畑に向かう途中、卒倒なされました」

そう言ったのは、ステラウル師だった。チャリフ蜜鈴を燃やし終え、深刻な表情をしている。

聞いたファマエン師は、「おお、影の人よ……」と呟いた。

ステラウル師は、入口を振り返った。

チャリフ「蜜鈴は、見習いが無理をして運んできたようです。燃やしましたが、『あれ』は消えない」彼は、血の気のない顔をして口元を覆った。

ギュグリンブ師が、さつと言った。

『あれ』ではなく、（見えない死）です。ちゃんとした名前で呼ばなければ、よりいっそう恐れを抱きますよ」彼女は続けた。「ステラウル師、具合が悪ければ医務室へ……」

「私は大丈夫です」ステラウル師は胸を張った。「それよりもまず、ここに並ん

だ野菜をどうするかで……」

「燃やしませんよ。私たちで、〈見えない死〉にかかっていないかどうか、調べます」

全員、ぎよっとした。ファマエン師が暴言を吐いて反対しようとしたが、ギユグリンブ師がすぐに遮った。

「ここに立っていて話ができるのであれば、長机にあるものはまだ平気であるはずです。それに、今は野菜が高騰している。あなたたちもおわかりでしょう。もう食材の減少が起きている。どんな状況でも、食堂は食堂の機能を維持しなければ。見習いの食料を確保し、提供すること、これができなければ、飢えがはじまります」

泣き止んでいたレイ師が、再び静かにすすり泣いた。ファマエン師は舌打ちをし、箸の柄を使って、端のバツサムをつついて調べ始めた。彼はしばらくすると、怒鳴りながら調理室に向かった。「やい、包丁をもってこい」

「師の人の殺し合いには手を貸さないよ！」調理室からどら声が返ってくる。料理長であるつくりの人ニータルだ。彼女は、干して縮んだ木の実のような顔をさらにしわくちやにして、調理場から顔を出し、ファマエン師と罵り合った。

だれもが、最悪の事態を免れる術すべを探し求めて必死だった。ステラウル師が、ギユグリンブ師に屈みこんで静かに呟く。

「管理塔へ、伝書鳩を飛ばします」

「すでに星読み学のマーゼン師に頼みました」ギユグリンブ師はきっぱり言った。鋭角な眉が、いつそう厳しく目の上にそびえたつ。「今は、ここを安全な場所に戻すのが、我々の任務です」

ニータルからようやく包丁を手に入れたファマエン師が、ざっくりとバツサムを切り分けた。粒のそろった果肉が現れたが、バツサムは、あざ笑うように

左右で揺れた。